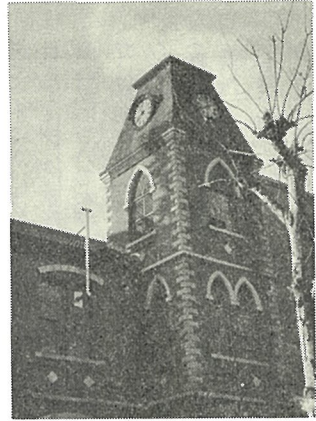




父・延年と加藤コレクション

——加藤先生のお父さん^①延年先生は、同志社ご出身で、同志社中学や大学予科の先生をされた方ですね。

加藤 そうです。明治二十二年に普通学校を卒業しまして、郷里の柳川へ帰り、父と同じ筑後柳川藩出身の海老名弾正先生が校長で、開校して間もない熊本英学校の教員になりました。同時に、その姉妹校であった竹崎順子女史が経営していた大江女学校の教員も兼ねました。両方とも組合教会系の学校で、教員の交流や兼務をやっておったようです。

熊本英学校から、「理化の教員になれ」といわれて、同志社ハリス理化学校へ派遣されて入学し、下村孝太郎先生にも習ったと申しておりました。ところが、英学校が財政難でつぶれまして、明治二十八年にやむをえず中途退学して帰郷し、出身校である柳川伝習館（中学校）の教員になりました。そして、明治三十二年四月から同志社へ帰りました。

——同志社にとっては大変な時代ですね。

加藤 そうです。俸給のことも何も聞かずに、言われるまま赴任したようです。当時、

北寮（現大学会館の位置）の東側に教師館があり、そこへ住まわせてもらったわけです。教師館の西寄りには学生寮が二棟ありましたが、同志社はその一棟を中国人留学生の学校、善隣学院に二年間ばかり貸していました。

——それは同志社の留学生ですか。

加藤 いいえ、同志社にも中国人留学生はいましたが、彼らは北寮などにいました。当時の同志社は生徒数が少なくて、寮は全部で一五、六棟もありましたが、がらあきで、二人居る部屋に一人で住んでいるといった状態でした。それで中国人留学生の一小私学にも貸していた。十四、五人でしたが、そこでは留学生のための授業を行ない、漢文の牧野信先生なども教えに行っておられました。

学校は二年ばかりでつぶれましたが、同志社が国際的な視野と理解をもってあったので、中国人もそうしてやってきたわけです。

——加藤先生は、延年先生と一緒に京都へ来られたんですか。

加藤 いや、翌三十三年十二月で、小学校一年生の二期が終ったときからでした。室町小学校へ移り、当時は四年制で、卒業しまして第一高等小学校（現上京中学校）へ入り、

加藤延雄 元中学・高等学校長

に聴く

同志社——明治・大正・昭和

聴き手

河野 仁 昭

（社史料編纂所）



加藤 延雄氏

二年修了しましてから、同志社普通学校へ入學しました。

——延年先生が担当された科目は何ですか。

加藤 生物、動植物、地理、それから歴史などもちょっと教えておったようですね。前任者は阿部磯雄先生で、生徒から「阿部先生よりよい授業をやれ」(笑)と言われて、父は「阿部先生はばくの先生でもあり、なかなか立派な先生だった。先生よりよい授業をやれと言われても困るが、君たちの期待にこたえるよう一生懸命やる」と、そんなこたえをしたそうです。

——延年先生といえば、動物の標本などを集めた「加藤コレクション」をすぐ思い浮かべるんですが、あの収集は早くから？

加藤 明治三十二年に同志社の教員になって間もないころからはじめたようです。その前に、宣教師で自然科学を担当しており、専門が地質学で新島先生とも懇意にしておられたM・R・ゲインズ(明治十七年より同二十二年まで在職)が、立派な鉱物の標本をかなりたくさん集めておられたのに、管理がわるくて、高価な珍しいものとか宝石などは、何者かによって持ち去られていたようですが。

——どこへ置いてあったんですか。

加藤 ハリス理化学館の二階です。それから、鉱物の標本以外にも、理化学校出身の三宅驥一博士が植物の専門で、植物の標本をたくさん集めてありました。それで父は、動物の標本がないから集めようという気になったようです。

——金のかかるものは大変だったでしょうね。

加藤 父が収集していることを知った卒業生の寄付や、「加藤さんの道楽なら身受けさせてやろ」(笑)と、猩猩の剥製を寄託される人などもあったり……。仮剥製をして外国と交換をしたものもあるようです。それから、アメリカン・ボードに寄託されていたハ

リス理化学校の基金の利子が毎年送られてきますので、理事会にお願いして、その金で買ったものなどもあるようです。

後には、中立売御門前で平瀬与一郎という人がやっていた平瀬会館(私学会館の南隣に現存)というのがありまして、ここは貝類が中心でしたが、父は島津製作所博物館のほか、そこへも手伝いに行っており、平瀬会館が解散したとき貝類の標本一組を格安の値段で譲り受けたりましたようです。その会館に高等小学校を卒業したばかりの黒田徳米(とくみ)という少年がいて、父は彼に英語を教えるなどしておりましたところ、黒田少年は後に有名な偉い理學博士になりました。

——全部で、何点ぐらいあったんですか。

加藤 標本目録をつくる手伝いなどはさせられましたが、点数は憶えておりません。

明治時代の同志社

——ところで、明治三十三年から同志社におられた先生には、当時の思い出もいろいろおありだと思えますが。

加藤 教員の息子だからというので、校内で何か催物でもやるときには呼んでもらえた



『校友同窓会報』加藤延年先生特集号

りしたものですからねえ。いちばんつよく印象に残っているのは、チャペルで幻燈会をやるときなどに見せてもらったことです。それから、音楽会とか。

チャペルでは宗教的な行事以外に、いろんな催物をやりました。私は明治三十九年に普通学校へ入学しましたが、そのころは全同志社の者がチャペルへ入っても、二階は使う必要がなかった。明治三十年代は同志社が衰微の極にあつたときで、それはもう淋しいものでした。寮もがらあきで、北寮の門衛所には、新島先生の姉さんのお孫さん（しずえ、秋保藤助さん——後の速水予科長——と結婚）速水先生ご一家が住んでいました。

私が入学した次の年あたりから生徒も増え

はじめ、波多野培根、福井大三郎といった先生方が赴任して来られました。それでも施設には余裕があり、各先生の教室はそれぞれ固定されており、時間割に従って生徒が移動することが多かったものです。それから、教室の壁はみな黒板になっておりまして、宿題などは自分の席の近くの黒板に書けばよかったです。波多野先生の授業などは、ご自分のノートを黒板に書かれることが主で、前の黒板が文字でいっぱいになると、生徒の傍の黒板へも書きに来られる。そして、ときどき書く手を止めて講義をされる、といった授業のやり方でした。

——生徒はそれを、ノートに写すわけですか。

加藤 そうです。ところが当時の机は、椅子にメモをとる簡単な台を取り付けただけのものです、それを五脚一組にしてありました。波多野先生のような授業は筆記が大変でしたし、テストのときなど、ちょっと視線をずらすと隣の答案がみえるんですよ。（笑）

大正時代の同志社

——先生が大学へ入学されたのは、専門学

校令による大学が発足した年ですね。

加藤 そうです、大正元年、第一回生です。水崎基一先生から、明治二十二年の秋、新島先生が募金で東京へ出掛けられるときに全校の生徒を集めて別れの演説をされたが、それを聞いて非常に感激した、先生の遺志を実現するよう努力したい、というような話を聞かされました。

——原田助社長と波多野中学教頭は、宗教教育に対する考え方がちがっていた、どうもそれは、大学の宗教教育がルーズになって来ているのに原田社長は放任している、そういった問題が一つあったんじゃないですか。

加藤 それはなかったと思います、お二人とも宗教行事などについては固い方でした。

私の普通学校時代は半数以上が寄宿生でした、室長は神学生が熱心なクリスチャンであり、寮長はむろんそうで、そこには一体感もあり、クリスト教の影響がよかったのですからね。その人たちが大学生になるわけでしょう。ただ、年がたつにつれて、ノン・クリスチャンの大学生や教員が増えていったことは事実です。

——京都帝大から来られる講師が、いわば

大学の中心だったのでしょうか。

加藤 講師のなかでも、川田嗣郎先生（社会学）のように非常に理解のある方もおられました。しかし中には、大学で宗教的な行事などをやることに批判的な先生もおられ、ある法学の講師は、同志社のキリスト教主義教育について教室で批判され、「同志社の教育方針やキリスト教の行事をやるのが、いいと思う者は手を挙げて」と言われた。すると、学生全員が立ち上りましたよ、賛成の意思表示です。ノン・クリスチャンの学生までもが立ち上ったので、私はびっくりしました。それで先生は真ッ青になって、黙って教室を出て行かれましたがね。そういう状態ではありましたが、年々宗教に対する関心は薄らいでいったようです。

——すると、中学と大学では、徐々にちがって行ったとみてよいわけですね。

加藤 そのころ、滝本誠一という経済学の教授——私の恩師でもあるわけです——が、学内のかきまわしをやられて、日野真澄、水崎基一といった先生方が辞職されることになったわけです。

——原田社長の進退問題で……。

加藤 まあ、そうでしたが……。社長は学校の内政と外交両面の責任者なのに、原田先生は内政にあまり熱心でないという不満が、教員の間にありました。それで、教育上の責任者として、全体的な指揮をとってもらいたい、学校の重要な行事があるときには出席してほしい、そういった要望が出たわけです。

——すると、外交面で動かれることが多かったわけですね。

加藤 そうです、その点では大変な功勞者で、同志社のことを国内外に訴えられ、また、課外講演の講師として、国内外の多数の有名人を招かれ、私たち学生は学校にいながらにして、当時の各界のトップ・レベルの方々のお話を、直接聞くことができたのです。そういう面での教育上の功績は、大変大きかったと思います。

——原田総長の留任が決ったとき、波多野培根先生は辞職され、その後、西南学院へ移られますね。延年先生の立場は？

加藤 父の考えも波多野先生と同じでした。が、学校に留って改革改善に努めるということで諒解していただいたようです。波多野先生は西南へ移られてからも、京都へ帰ると私

の家へ立ち寄って下さいましたし、父が死んだとき（昭和二十年四月二十五日）は、告別式の説教を下さいました。

——先生は大学を卒業（大正五年七月）されて、すぐ同志社へ残られたんですか。

加藤 いや、当時は公的な制度ではなかったのですが研究科というものがありません。そこで二年間学びました。毎年二、三人残っており、学費は免除されました。奨学金ということだったんだろうと思います。

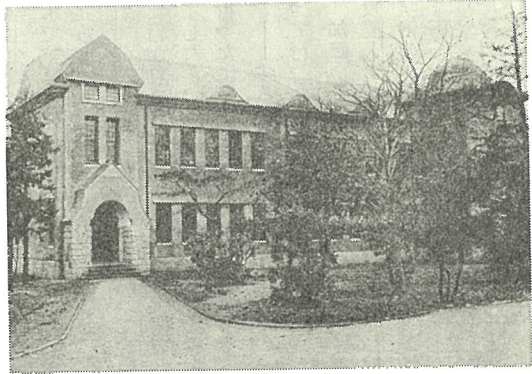
それから、市立和歌山商業学校（後の和歌山高商）へ赴任しました。前任者は山田貞夫先生で、その後任のようなかたちでした。

——和歌山高商というと、後に島本英夫先生が校長になられた学校ですね。

加藤 そうです。そして私は、大正八年四月から同志社へ帰りました。中村栄助（総長事務取扱）さんが来られて、「どうかよろしくお願いします」（笑）といわれましてね、恐縮したことを憶えております。

——そのころの中学生は何人ぐらいいたんですか。

加藤 一クラスの定員が五十名で、それが全部で十五クラスぐらいありました。



聚 芳 館

——教室はやはり彰栄館や立志館で……。

加藤 それに醇厚館、ハリス理化学館、聚芳館などでした。聚芳館を建築するとき（大正十一年）は、教員が二人一組になって父兄の閨を募金にまわりました。私は南石福二郎先生と一緒にでした。

昭和・戦時下の中学

——波多野培根先生のあと、中学長が何人

か変わりまして、昭和六年から野村仁作先生が中学長事務取扱になりますが、野村先生は海軍の退役大佐でしょう。末光信三先生が中学校から女学校へ異動させられた後だけに、ちょっと異色の人事という感じがするんですが。

加藤 そうなんですが、野村先生を推薦されたのは大沢徳太郎理事だった。ある時、大沢理事などが舞鶴の海軍基地を見学に行きましたとき、海軍側から応待に出られたのが野村先生で、大変親切にして下さったんだそうですよ。それに、野村先生の息子さんが同志社中学の生徒でもあったので、「野村さんがいい」、ということになったようです。

——野村先生は、ノン・クリスチャンでしょう。

加藤 そうです。しかし後に洗礼を受けられました。軍人あがりではあっても、学校の大きな教育方針については、それまでほとんど違いはありませんでした。

——同志社中学からは、旧制第三高等学校など官立の上級学校へ進学した人が多いですね。

加藤 野村中学長時代に、数学の得意な連

中を集めて「数学組」というのをつくった。官立の高校へ進学したい生徒のための補習科のようなものを設けまして、随分多くの生徒が同志社大学以外の学校へ進みました。一方また、同志社の方がいいということで、優秀な人が帰って来ました。

もともと、同志社の教育のレベルは高かったのです。私の父が学生だったころは、普通学校が高等学校程度でして、たとえば足利武千代さんなど、京都第一中学の二年から同志社の一年へ入学しなおして、それでもついていけないぐらいだったと語ってありました。

また学科も、学年・学期で固定したやり方をせず、一つのテキストが済むと、学期の途中からでも次へ進むとか、天文学をやっても、それが終わると地学をやるといった具合だったと、父が言っておりました。私の学生時代でも、英語など大体一年以上級程度のテキストを使っておりまして、後になっても英語の時間数は他の中学に比べて多かった、いわば伝統ですね。だから特別の勉強をしなくても、官立の高校へ入れたのです。

——ところで、野村中学長時代に日中戦争、そして太平洋戦争と、戦争の時代に入る

わけですが、中学は昭和十八年四月から中学校令による同志社中学校になりますね。

加藤 京都府の学務課などから、やかましく言ってきたわけですが、「国策に添った教育をする学校にしないかん」とね。牧野虎次総長や野村先生も随分苦心されましてね、結局逃げ道を考えたんです。新島先生が三十番教室で聖書を教えられたように、課外の科目としてキリスト教や聖書を教えるとか、宗教的な行事もやる、「正課じゃないんだからいいだろう」ということで府の学務課の諒承をとりつけまして、「今までどおりやってよろしい」と、野村先生は教員会議ではっきり申しました。

——じゃあ、表向きと実際はかなりちがっていたわけですね。

加藤 はい。でもまあ、それまでの間、そりゃ悩みもし、議論もしました。「キリスト教を捨てたら新島先生の学校ではなくなる」とか「同志社教育を支持して寄付して下さった方に対する反信行為だから、寄付金は返すべきだ」とかねえ。私などもそう申しましたし、夜も寝れないことがありました。政府の方針に賛成の先生方も多数おられました。

最後に野村校長から「従来どおりやってもらったらよろしい」と言われまして、一応は安心したわけですね。

——府の学務課が、監督にくるようなことはなかったんですか。

加藤 それはなかったです。府よりも配属将校がうるさかった、「わしらが指導する」というような見幕でしたよ。

——なるほど、その方が厄介ですね。しかし間もなく学徒動員で、授業は出来なくなるわけでしょう。

加藤 そうです。まさに暗黒の時代でした。

戦後の中学・高等学校

——戦争が終ったときどう感じましたか。

加藤 何しろ日本は連合軍に負けたわけだ、どこの国の軍隊がやってくるかわからない、それはもう、大変心配しました。占領軍次第では、今度こそキリスト教教育どころか、同志社そのものが潰されるかもわからんわけでしょう。

——マッカーサーがやってきたので、ほんとされたわけですね。

加藤 まあそうですね。同志社とは長年つきあいのあるアメリカのことですから。

——新制中学・高校発足のころ、先生は中学校長でしたか。

加藤 そうです。昭和二十年三月に野村先生が辞任されて、後任は前窪勝之助先生でしたが、ご家庭に不幸があったり校務その他で、先生はノイローゼ気味になられて入院されるなどで、私は二十二年四月に校長になりましたが、それまでの一年間はかり、教頭として校長代理のようなことをしておりました。校長に就任した年に中学、翌年高校が発足しました。

——スムーズに行ったわけですか。

加藤 いや、二十二年一月ごろになって、女学校校長の末光信三先生から電話で、「女学校は男女共学にしない」と言われましてね。それまでに末光先生と私が牧野総長に呼ばれて、「同志社は中学校と女学校を一緒にして共学にしたい」と言われまして、末光先生もその方針を諒承されている様子だったんです。ところが、女学校は共学にしないと、言うわけでしょう、そのときはすでに市内の小学校その他に共学の方針を伝えてあった。

だから私も慌てましてねえ、何しろ女学校を当にしていたので、女子生徒の受入れ準備はなにもしていなかったのです。しかし、今更あとへ退くわけにもいかず、総長も「中学校だけでも共学にしましょう」と言われるので、急遽女子便所を作ったりしましたが、女子に関係のある科目の担当者は急には得られないので、女学校の先生に応援をお願いしました。

——女学校は明治の創立以来、男子学校と一線を画すようなところがありますね、創立記念日も四月にするとか、同窓会は校友会と合体しないとか。そういう歴史が終戦後も生きていたんじゃないでしょうか。

加藤 どうでしょうかねえ、そうかも知れませんが。校友会・同窓会は、早く一緒になった方がいいですねえ。

——牧野虎次総長は男女共学に賛成だったわけですか、私は湯浅八郎総長の方が熱心な推進者かと思っておりましたが。

加藤 湯浅先生は、女子だけを教育する学校もあってよいというお考えでした。

——女子生徒の受け入れ体勢は不十分であり、中学校としては明治以来始めてのことです。

しょう、不安はありませんでしたか。

加藤 同志社には新島先生以来、男女は教育においても平等に扱うべきだという考えがあり、大学は海老名正総長時代からすでにやっておりましたから、中学校の教員会議でも不安や反対意見はありませんでした。

——中学校が踏み切らなかったら、男女共学は流産していたかもしれませんね。

加藤 そうです。女学校があるんだから、中学校にまで女子生徒を入れる必要はないという意見が、学内には多少あったようです。

——昭和二十六年九月に香里学園と合併して、山田貞夫高等学校長は香里中学校長になられ、加藤先生が中学と高校の校長をしばらく兼任されましたが、今出川と岩倉を毎日往き来されたんですか。

加藤 そうです。総長の車が空いているときは使っていていいという条件でした。車のないときはバスや電車で。

——そのころは、両校の先生方の間には交流があったようですね。

加藤 私が兼務をやめてしばらく後に、そういう交流も止めになりました。同志社の一貫教育を貫徹するためには、ああいうことは

やった方がよいと、今でも思っております。

ただ、今は校長や教頭はじめ教員の任免など、各学校の教員会議を通さなければならず、総長・理事長といえども命令権を行使しにくい状態でしょう。だから、教学の責任者である総長の下にでも、よほど教育に理解のある権限をもった人を置き、その人が中心になって各学校間の人事や教育について話合いを進めたり、プランを立てたりしないことに駄目でしょうかね。

——教育委員会のような機能ですか。

加藤 そうです。とにかく、一貫教育をしっかりやっていかんことには、同志社がたくさん学校を経営することの意味はないと思うのです。人数も増え、規模も大きくなりまして、昔のような具合にはいかんでしようが、今後の新しい一貫教育の在り方を、みんなですっきり考えていただきたいと思います。

——暑いときに、長時間どうもありがたうございました。

(一九七九年七月二十三日クラーク記念館にて収録)